

Give 軽動詞文について

西尾美穂

(高知大学教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門)

On *GIVE* Light Verb Constructions

Miho Nishio

Kochi University Research and Education Faculty Humanities and Social Science Cluster Humanities and Social Science Unit

Abstract: In this study, we examine the semantic and syntactic properties of *give*-light verb constructions. On the basis of the observation that light *give* has semantic properties such as the directionality of energy flow, aspectuality and volitionality, we show that light *give* has semantic contents which can be captured appropriately in terms of Lexical Conceptual Structures (Jackendoff 1990 among others).

キーワード：軽動詞, *give*, 語彙概念構造

Keywords: Light Verb, *Give*, Lexical Conceptual Structure

1. はじめに

Give という動詞はさまざまな構文に現れるが、本稿では、(1)のような軽動詞構文(light verb constructions)について考察する。

- (1) a. She gave a little shiver.
 b. It rather did give me a shiver up the back.
 c. She had given him a bad scare.

(Jespersen 1954: 118)

この構文において、give は人称や時制の標示などもつばら文法的な機能を果たし、主要な意味はその後ろに現れている動詞派生名詞が担っている。しかし、(2)や(3)の解説に述べられているように、抽象的で希薄ではあるが give もその基本義に由来する何らかの意味を表していると思われる。

- (2) この語はさまざまな意味で用いられるが、その中核の意味は「・・・を持たせる」(cause to have)に求めることができる。これに種々の条件が課され、それぞれの語義が生まれる。たとえば〈無償で〉という条件が課されることにより「贈る」の語義が生じる。その他〈一時的〉により「預ける」、〈交換で〉により「支払う」「売る」の語義を得ることができる。この3つの語義には物ないしはその所有権の移動ということが関与するが、さらにこれは抽象的な物の移動へと転用されて、「音やことばを発する」「情報などを伝える」「結果などを生み出す」「行為を加える」などの意でも用いられる。

(小西 1980: 637)

- (3) 「物(の所有権)を(人)に与える」が中心義。一方向へのものの移動を共通軸にして、譲渡、産出、伝達、行動、圧力の5系統に分かれる。譲渡系では、ある人から別の人へ、物と同時にその所有権が移動するのが典型である。産出系では、元々はなかった物を存在する状態にするという働きに着目して、「〈人・動植物が〉〈子供・卵・実などを〉産み与える」の意義に展開する。伝達系では、情報などの移動に着目して、「〈人・本などが〉〈情報・指示・気持ちなどを〉(人などに)与える」を意味する。行動系では、行為の実行に着目して、「〈行為などを〉(人などに)与える」を意味する。圧力系では、「〈圧力・重力を〉(物などに)与える」の意義に広がる。

(瀬戸 2007: 410)

それでは give はどのような意味内容を持っているのだろうか。第2節では give を主動詞とする軽動詞構文(give 軽動詞文)と give 軽動詞文に含まれる動詞派生名詞に対応する基体動詞を主動詞とする文(単純動詞文)の意味の違いを見ていく。第3節では give 軽動詞文と have 軽動詞文との意味の違いを見る。第4節では、軽動詞 give がどのような意味内容を持つか考える。

2. Give 軽動詞文と単純動詞文

Give 軽動詞文は、多くの場合、対応する単純動詞文を持ち、ほとんど同じ意味を表す。

- (4) a. Mary gave him a passionate kiss.
 b. Mary kissed him passionately.
- (5) a. She gave her mosquito bites a savage/long scratch.
 b. She scratched her mosquito bites savagely/for a long time.

- (6) a. Mary gave John a wink.
b. Mary winked at John.
- (7) a. John gave the wall a paint with Dulux.
b. John painted the wall with Dulux.
- (8) a. John gave a laugh.
b. John laughed.
- (9) a. Will you give me a lend of your ruler.
b. Will you lend me a ruler?

(Dixon 1991: 341, 343, 345, 346)

Sinclair他(2009: 280)や相沢(1999: 152)が指摘しているように、単純動詞文では連続した過程としての行為そのものに焦点が絞られているのに対して、give 軽動詞文では出来事を完結された一つのものとして述べているという違いがある。これは単純動詞文においては事態が連続的スキャニングによって捉えられ、動詞（give 軽動詞文の動詞派生名詞に対応する基体動詞）で表されているのに対して、give 軽動詞文においては同じ事態が一括スキャニングによって捉えられ、（動詞派生）名詞で表されていることによると考えられる。

(4)から(9)の例文では、give 軽動詞文と単純動詞文が対応し、意味の違いも軽動詞 give の存在以外の要因によって説明されるが、give の意味特性のせいで単純動詞文に対応する give 軽動詞文が不適格になる場合や、単純動詞文と対応する give 軽動詞文が異なる意味を表す場合がある。(10)の例は、spill 「こぼす」という人が偶然に行うことを強く連想させる動詞は give 軽動詞文になりにくいことを示している。(11)の例文では、a 文は Lisa が非意図的にそのショーを「見そこなった」という意味にも、意図的に「見なかった・見ることを回避した」という意味にも解釈することができるが、b 文は意図的な行為としての解釈しかできない。(12)と(13)の例は、give 軽動詞文が長時間に渡って継続的に行われる行為とはなじまないことを示している。(12)の b 文では、不定冠詞 a が行為の 1 回性と結びついているのかもしれないが、(13)の b 文のように複数形にしても不自然な文であるとされる。(14)の a 文の動詞 throw と b 文の動詞 catch では、参与者間のエネルギーの流れの違いがある。a 文では、投げ手からボールにエネルギーが向かっており、主語がエネルギーの流れの始点になっている。それに対して b 文では、移動してきたボールが捕り手の手の中で静止するので、主語がエネルギーの流れの終点になっている。a 文と b 文の対比は、give 軽動詞文の主語がエネルギーの流れの始点でなくてはならず、終点にはなれないことを示している。

- (10) a. I spilled the milk.
b. *I gave the milk a spill.
- (11) a. Lisa missed the show.
b. Lisa gave the show a miss.
- (12) a. Tom was kicking the ball the whole afternoon.
b. *Tom was giving the ball a kick the whole afternoon.
- (13) a. Tom gave the ball lots of kicks during the afternoon.
b. ?Tom was giving the ball lots of kicks during the afternoon.

- (14) a. I gave the ball a good throw.
b. *I gave the ball good catch.

(Newman 1996: 203, 204)

Newman(1996: 202)は、軽動詞構文の *give* が「誰かが何か・誰かと相互作用する」(“someone interact with something/someone”)というスキーマ的・概略的な意味を持つとしている。これにより、軽動詞 *give* が「主語+GIVE+目的語+動詞派生名詞」という統語的枠組みに現れ、主語指示物と目的語指示物の相互作用を表すことが捉えられる。しかし、Newman 自身が上記の例によって示しているように、軽動詞 *give* は意図性、瞬時相、エネルギーの流れ(主語を源 source とする)などの意味特徴を持っていることが捉えられていない。

Have や *take* を主動詞として用いる軽動詞構文は、「主語+HAVE/TAKE+動詞派生名詞」という統語的枠組みに現れることから、主語指示物と出来事との相互作用を表すと考えられる。さらに意図性や相(アスペクト)などについても、*have/take* の軽動詞構文は、軽 *give* 軽動詞文と異なる特性を示す。第3節では、同じ動詞派生名詞でも、どの軽動詞と結びつくかによって文の意味が異なることから、「軽い」なりに、軽動詞 *give* にも意味があることを見ていく。

3. 軽動詞 *give* と軽動詞 *have* の比較

(15)から(17)の例は、軽動詞 *give* と軽動詞 *have* が音などを放出する口頭の行為や身体動作、顔の表情などを表す動詞派生名詞を従える場合の意味の違いを示している。*Give* 軽動詞文が1回の瞬間的な行為を表すのに対して、*have* の軽動詞構文は継続的な行為を表す。

(17a)は1回「は(ha)」と笑うことを表すことが多く、(17b)はものすごくおかしくて数分笑うことも表せる。*Give a cry* と *have a cry* の違いも同様で、前者は1回の「クスン」を表し、後者はさめざめと泣くことも表せる(Dixon 1991: 348)。さらに、(17)の例は、*give* 軽動詞文が無意識的な行為を表すのに対して、*have* の軽動詞構文は意図的行為を表すことを示している。小西(1980: 638)は、(18)のように、このタイプの *give* 軽動詞構文は意志副詞と共起せず、命令形にもならないことを示している。(19)の「不平を言う」や「助けを求めて叫ぶ」は意図的行為を表しているが、これは間接目的語をとりコミュニケーションを表すタイプの構文から、間接目的語が省略されたものと考えられる。

- (15) a. My throat irritated with the fumes, I gave a cough.
b. She had a bad cough all night.

- (16) a. She gave a smile at the scene.
b. Mona Lisa has a smile on her face.

- (17) a. She gave a little laugh in spite of herself.
b. We all had a good laugh when we heard his joke.

(相沢 1999: 101)

- (18) a. *John gave a jump intentionally.
b. *Give a jump!

(小西 1980: 638)

- (19) a. give a grunt
b. She gave a shout for help.

(相沢 1999: 44, 47)

(20)から(30)は、軽動詞 give と軽動詞 have が相手・対象のある身体動作を表す動詞派生名詞を従える場合の意味の違いを示している。(20)と(26)において、X GIVE Y a look は、X と Y が意志を通じ合ったことを表す。(20a)において「私(me)」は「彼(he)」が見たことに気が付いている。(26a)においても、Mary は John が見たことに気が付いている。X HAVE a look at Y は、X が Y をある時間見たことを表すだけで、Y がそれに気が付いたかどうかは関係ない。従って、(20b)のように無生物が対象になることができる。(26b)でもメアリがジョンを見たというだけで、ジョンが見られていたことに気が付いたかどうかは関係ない。(28)の動詞派生名詞 smile は、(i)ある表情を浮かべるしぐさを表す場合と、(ii)そのしぐさによって相手に何かを伝えることを表す場合がある。(28a)は、(30a)と同様、(ii)の意味であり、give 軽動詞文が用いられる。(28b)は、(29b)と同様、(i)の意味であり、have 軽動詞文が用いられる。以上の例は、意志を通じることにより相手に影響を与える行為を表す場合には、give 軽動詞文が用いられ、本人が勝手にする行為で相手になら影響を与えない場合には、have 軽動詞文が用いられることを示している。

(21)と(27)の例も、give 軽動詞文には動詞派生名詞が表す行為によって対象が影響を受けたという含意があるのに対して、have 軽動詞文にはそのような含意がないことを示している。(21a)「猫」をなでると猫は気持ちよくなりのを鳴らすなどの影響を受けるので、give 軽動詞文がふさわしい。(21b)「毛皮のコート」は無生物であり、なでても何も感じないしその状態も変化しないので、主語の経験を表す have 軽動詞文がふさわしい。(27)も同様に、a 文の目的語である「子供」は、労力を使わずに済み、楽ができるというように影響を受けるが、b 文の目的語である「スーツケース」は、無生物であり心理的にも物理的にも変化を被らないので、give 軽動詞文を用いることはできない。

(22)から(25)の例は、give 軽動詞文が1回の瞬間的行為を表すのに対して、have 軽動詞文が継続的行為を表すことを示している。(22a)は1回の短いキスを表すが、(22b)はある程度の時間キスしあっていたことを表す。(23a)は1回のパンチを表すが、(23b)はパンチの雨を降らせたことを表すこともできる。(24a)は、(25a)と同様に、1回引っ張ったことを表す。(24b)はしばらく引っ張ったことを表し、(25b)の jerk は1回ぐいっと引っ張ることを表すので、have の軽動詞構文には適合しない。

(20) a. He gave me a suspicious look.

b. Have/Take a look at that notice.

(21) a. Go on, you give it a stroke! (it=the cat)

b. Go on, you have a stroke of it! (it=the fur coat)

(22) a. Tom gave Mary a kiss.

b. Tom and Mary had a kiss.

(相沢 1999: 102, 103)

(23) a. Go on, you give it a punch.

b. Go on, you have a punch on the punchball now.

(24) a. You give the rope a pull.

b. You have a pull of the rope.

(25) a. Give it a jerk.

b. *Have a jerk of it.

(26) a. Mary gave John a look.

b. Mary had a look at John.

(27) a. I gave the child a carry.

b. *I gave the suitcase a carry.

(28) a. Tom gave Mary a smile.

b. Tom had a smile at Zelig's antics.

(29) a. *Tom gave Mary a laugh.

b. Tom had a laugh at Zelig's antics.

(30) a. Tom gave Mary a wink.

b. *Tom had a wink at Zelig's antics.

(Dixon 1991: 348, 349, 350)

第2節と第3節での観察により, (i) 軽動詞 give は瞬時性・1回性という意味特徴を持つこと, (ii) 自動詞的行為を表す場合には無意識的・非意図的という意味特徴を持ち, (iii) 他動詞的行為を表す場合には, 主語指示物の意図性・目的語指示物の被影響性, 主語指示物から目的語指示物へのエネルギーの流れという意味特徴を持つことが分かる。

4. 軽動詞 give の意味内容

Kearns(1988/2002)は, 伝統的に軽動詞構文とされてきたものを, 動詞派生名詞が以下の統語的操作を受けるものと受けないものに2分する。

(31) 受動文の主語化

a. *A groan was given by the man on the light.

b. *A pull was given (on) the rope.

c. A demonstration of the new equipment will be given on Monday.

(32) WH 疑問詞化

a. *Which groan did John give?

b. *Which pull did John give the rope?

c. Which explanation did the second witness give for the delay?

(33) 関係節による修飾

a. ??The groan (which) he gave startled me.

b. ??The pull (which) John gave the rope had little effect.

c. The explanation (which) the second witness gave seemed more plausible.

(34) 代名詞化

a. ??The deceased gave a groan at around midnight, and gave another one just after two.

- b. *I gave the soup a heat and then Bill gave it one too.
- c. If you can give a presentation after lunch, I'll give one/mine after yours.

(35) 定冠詞・指示詞による限定

- a. I jumped a mile. *Who gave the groan just now?
- b. The bike looks terrific. *Who gave it the polish?
- c. The representative who gave the demonstration left his card.

(Kearns 1988/2002: 2-3)

日高(2007)は、動詞派生名詞が多義であり、出来事の意味とその出来事の結果として産出される結果産物の意味を持つ場合、出来事としての解釈を強制する形容詞で修飾した場合と、結果産物の解釈を強制する形容詞で修飾した場合で、上記の統語操作を受けた文の容認可能性が異なることを指摘している。(36)の形容詞 loud は「叫び声」の解釈を要求し、(37)の形容詞 sudden は出来事の解釈を要求する。

(36) a. John gave a loud shout.

- b. A loud shout was given by John.
- c. Which loud shout did John give?
- d. John gave that loud shout.
- e. John gave a loud shout, and Mary gave a louder one.

(37) a. John gave a sudden shout.

- b. A sudden shout was given by John.
- c. *Which sudden shout did John give?
- d. ?*John gave the sudden shout.
- e. ?John gave a sudden shout, and Mary gave one, too.

(日高 2007: 49)

派生名詞が出来事としての解釈を受ける場合には、指示性を持たないために、WH 疑問文の焦点になったり、関係節で修飾されたり、定冠詞や指示詞によって限定されたり、代名詞化されたりできないと考えられる。

Kearns(1988/2002: 12)は、真の軽動詞(true light verbs)は、統語的項構造(Syntactic Argument Structure)に従って句を投射するが、その語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure)は活性でない、つまり、語彙概念構造が欠如しているために意味内容を持たないとしているが、軽動詞 give は、第2節と第3節で見たような意味特性を持つ。また、give NP a ___に生じる動詞派生名詞は、何らかの接触を表すものである(小西 1980: 648)という意味的な特徴付けができることも、軽動詞 give が補部に選択制限を課するような意味内容を持っていることを示している。

(38) 物理的接触

give NP a blow/a crack/a kick/a nudge/a pat/a peck/a bump/a jerk/a pull/a tug/a press/a push/a lick/a rub/a stroke/a sweep/a touch/an embrace/a hug/a shake/a squeeze/a stir/a fling/a flip/a flush/a rinse/a wash/a soak/a boil

心理的接触

give NP a dig/a smile/a frown/a look/a stare/a wink/a rebuke/a reprimand

軽動詞 give はどのような語彙概念構造を持つと考えられるだろうか。Jackendoff(1990: 266-7)によれば、(39)のような二重目的語構文に

現れる動詞 give と結びつけられる語彙概念構造の主題層(thematic tier)は(40a), 行為層(action tier)は(40b)のようなものである。

(39) Harry gave Sam a book.

(40) a. [CAUSE ([α], [GO_{Poss} ([]_A, [TO [β]]])]
 b. AFF⁺ ([] ^{α} _A, [] ^{β} _A)

(41)のような軽動詞構文の give は、主語指示物から目的語指示物へのエネルギーの流れと瞬間相の意味特性を持つので、主題層も行為層も持つと考えられる。しかし主題層の GO 関数の意味場素性についてはどのような動詞派生名詞と結びつくかによって異なるので Poss (Possessional field 所有場)という指定はないものと考えられる。行為層について、第2項は第1項の行為によって影響を受けるが、どのような影響を受けるのか、すなわち、プラスの影響を受ける受益者 (Beneficiary) なのか、マイナスの影響を受ける被害者 (Patient) なのかは、やはりどのような動詞派生名詞と結びつくかによって決まるので、+(positively affected)または-(negatively affected)の値を持つ。さらに、他動 give 軽動詞構文では、主語指示物の行為は意図的なので+vol(volitional)の素性も持つと考えられる。

(41) a. John gave Mary a kiss.
 b. John gave it a kick.

(42) a. [CAUSE ([α], [GO ([]_A, [TO [β]]])]
 b. AFF^{+vol} ([] ^{α} _A, [] ^{β} _A)

(31)から(35)の例が示しているように、軽動詞構文の出来事を表す動詞派生名詞は指示性を持たないため、give の項(argument)になることができない。日高(2007: 59)は Complex Predicate Rule によって give の意味構造と動詞派生名詞の意味構造を組み合わせて、「両方の意味を兼ね備えた新たな意味構造を作る」ことを提案しているが、その条件として、give と動詞派生名詞の「基本的意味述語のモードが一致して」いることとしている。(41)の例に挙げた kiss や kick のような接触動詞の語彙概念構造は(43)のようなものであり、この条件に合致しないため、この操作を受けるとは考えられない。

(43) [Event INCH [State BE_[+contact] ([]_i, [Place AT_[+contact] []_j])]]

軽動詞 give と動詞派生名詞がどのような仕組みによって複合述語を形成するか稿を改めて検討することにした。

5. まとめ

本稿では、軽動詞 give にも、エネルギーの流れ(他動詞の場合は、主語指示物から目的語指示物へ; 自動詞の場合は、主語から外側へ)やアスペクト(瞬時相)や意図性(他動詞の場合は、意図的; 自動詞の場合は、非意図的)という意味内容があり Jackendoff(1990)などで提案されている語彙概念構造によって、その意味特性をうまく捉えられることを見た。今後解決すべき問題は、軽動詞 give が補部の動詞派生名詞とどのような仕組みによって結びつけられ複合述語を形成するのかということである。

引用文献

- 相沢桂子. 1999. 『英語基本動詞の豊かな世界 名詞との結合にみる意味の拡大』東京: 開拓社.
 Brugman, C. 2001. "Light Verbs and Polysemy," *Language Science* 23, 551-578.

- Cattell, R. 1984. *Syntax and Semantics 17: Composite Predicates in English*. Sydney: Academic Press.
- Dixon, R.M.W. 1991. *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford: Clarendon Press.
- 日高俊夫. 2007. 「Give a ～の意味構造と生成過程」『英米文学』51: 2, 47-61.
- Jackendoff, R. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jespersen, O. 1909-49. *Modern English Grammar on Historical Principles*, VI. London: George Allen & Unwin.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論』 東京: くろしお出版.
- Kearns, K. 1988/2002. "Light Verbs in English," ms. MIT.
- Newman, J. 1996. *Give: A Cognitive Linguistic Study*. Berlin: Mouton de Gruyter.

辞書類

- 小西友七（編） 1980. 『英語基本動詞辞典』 東京: 研究社
- 瀬戸賢一（編） 2007. 『英語多義ネットワーク辞典』 東京: 小学館
- Sinclair, J. (他編) 2009. 『コリンズ・コウビルド英文法』 東京: 研究社

平成29年（2017）10月12日受理

平成29年（2017）12月31日発行